

平成 30 年度冬休み前全体学活校長挨拶

今日はいじめを通じて人間とは何かを哲学したいと思います。

いじめは何故なくならないか。それは「人間」本性に深く関わっているからです。いじめをする者は共通の敵を作り、人間以下の扱いをする。人間以下だからどんなひどいことでもできます。逆にひどいことができるということはその人を人間以下に見ているということです。また傍観も含めていじめに加担する者は仲間外れにされたくない。友達に離れていってほしくない、こういった所だと思います。

ここから考えられる「人間」の本性は何でしょう。まず言えることは、人間は自分より下のものを見出して安心し、みんなといっしょであることに安心を見出す、ということです。その根柢をさらに考えるなら、自分の存在に関する不安、孤独がある。不安だから周りを見、孤独だからつながろうとする。

人間はその存在において不安と孤独を抱えています。これが人間の悲しみの根本です。諸君の悲しみの根本を見つめて下さい。そこには自分の存在を認められない悲しみ、一人ぼっちはいやだという悲しみがあるはずです。いじめはこの人間の根本から起っている。だからなくならない。もっと言えば、いじめは厳密に考えるならば、誰の心の中でも常に遂行されています。そのことに気がつかないのは自己反省力がないと考えざるをえません。自分はいじめをするような人間とは違う、と言うことがすでに差別を含んでいます。しかし同時に次のことが言えます。

いじめられている人は人間扱いをされていません。自分が人間として認められないことで、自分が人間として生きていないという最大の苦しみを受けている。それはいじめている人は人間であるのだろうか。酷いことができることですでに人間の心を失っているのではないだろうか。また見てみぬふりをしていじめに加担している人も、すでに人間の心を失っているのではないだろうか。

アレン＝ネルソンさんという方がいらっしゃいました。ベトナム戦争に従軍して心が壊れ、それから人間の心を取り戻した人です。図書館にも本がありますので是非見てください。人間は基本的に人を殺すことに躊躇を覚えます。ですがそれでは兵隊は勤まりません。海兵隊（軍隊）に入るとは、人を殺せるような人間に改造する、ということです。最初に「お前のしたいことは何か」という問いに「殺すことです」を言わせます。「声が小さい、もう一度」と言うようにして、だんだん興奮した状態になっていくそうです。そうして「ベトナム人はグークス。人間ではない」というような教育を受けます。思い起こされるのは第二次世界大戦時に、日本でアメリカ人やイギリス人を鬼や畜生呼ばわりしていたこと（鬼畜米英）や、逆にアメリカ人が日本人のことをジャップと呼んで軽蔑していたことです。邪悪な連中であるから何をして構わない、原爆を落としてもいい、と。もしこのような考えを持ったならば、その時に人間は人間であるのだろうか。いじめで酷いことが平気でできるということはこれと同じことではないか。人に対して酷いことができる、あるいはそれをほっておけるということは、人間が人間でなくなっているということではないか。

いじめは人間本性から起っています。だから厳密に言えば、人間はこれをやめることはできません。しかしいじめは人間を人間でなくしてしまう。では人間が人間であるとはどういうことでしょうか。そこで話し合ってほしいのですが、人間であることに深い喜びを感じるのはどういう時でしょうか。「深い」とついていきますね。「深い喜び」とは悲しみに対立する喜びではなく、悲しみを包むような喜びです。そういう経験はないか。小説の中でもよい。話し合ってみてください。

（3人ほど手を挙げて答えてくれましたが、質問の仕方が悪かったようです。割愛させていただきます。答えてくれた生徒さん、ごめんなさい。）

ここでは深い喜びの内で死んでいった一人の男の話をしましょう。

もう亡くなりましたけど、マザー＝テレサという方がおられたでしょ。あの方は人間の中で、孤独を一番よく知っておられた方ではないかと思うんです。それで孤独に死んでいく者を見捨てることが

出来なかったのでしょうか。孤独な者を見捨てることが出来ない人というのは、孤独を知っている人です。本当に知っているので、孤独の中で終わる者を放っておくことが出来なかった、それで道端で死んでいく、世の中からも見捨てられ、誰にも顧みられることなく、自分すらももう自分を見捨ててただ死を待っているだけの道端で転がっている人を、人間としてのいのちを終わってもらおうと、「死を待つ人の家」というのを作って連れてきて、亡くなるまで介護してあげるんですね。実際にそういう方々は、半分腐ってもう身体から蛆がわいているんですね。それをこう払いのけて、抱きかかえてあげるんです。部分的に腐っていますからね、非常に匂うんです。男性でしたけれど、もう目が泳いじゃってるんですね。ものを食べてないでしょ。ほんとうに死ぬ間際なんですね。それでもね、やっと言葉をはくんですね。二言しかいわなかったんですが、最初に「臭いでしょ」って言うんですが、マザー＝テレサは「大丈夫ですよ」と男性を擦ってあげたりして、そのうちに男性が一つと涙を出して、やっとのことで「ありがとう」と一言言って死んでいきました。彼はそれまで泣いていなかったんだけど、世の中からも見離され、自分自身さえももう見捨て、誰からも顧みられることもなくただ死ぬのを待って、涙すらも失っていたんでしょうね。それをマザー＝テレサが来て、擦ってくれて言葉をかけてくれたというだけで、涙を取り戻し、何かを取り戻して命を終わっていく、そういうことをしていたマザー＝テレサ達が、常に大事に読んでいたお祈りがあるんですが、それがアッシジの聖フランシスコの祈りなんです。どんな祈りかというと、

私が慰められることよりも、私が人を慰めることができますように。
私が人に理解されることよりも、私が人を理解することができますように。
私が許されることよりも、私がひとを許すことができますように。
そして私が愛されることよりも、私が人を愛することができますように。
どうかお力を下さい。アーメン。

こういうお祈りなんです。これは祈ってできるようになろうというのではなくて、出来ない人が出来ないことを悲しんで祈らずにはおれないんですね。(佐野明弘著「迷いに帰る」真宗大谷派大聖寺教区教化委員会門徒研修小委員会、2010年、76～77頁)

人間は神ではないから本当の意味での「思いやり」や「慰め」の心を持つことは出来ません。不安や孤独を抱えているからどうしても自分のためということがぬぐいきれないんです。しかしそうした悲しみを抱えているからこそそれを分かち合ってくれるものを感じ、悲しみのままに深い喜びを感じることができるのです。この喜びは申し訳ない、ありがたいという感謝の念です。これが男の人が最後に言った二言、「臭いでしょ」と「ありがとう」です。

ですが人間はどれほど迷おうとも常にこうした人間を超えた働きによって生かされており、そのことの気づきと感謝が人間であることの深い喜びであり、この深い喜びが我々に「思いやり」の行為を促すのではないのでしょうか。そうしてマザー＝テレサを促したのもこうしたものではなかったのでしょうか。終わります。